

悪戦苦闘したビルマ戦線

福岡市東区 田中 次作

昭和15年7月、私にも召集令状が来た。24歳のときである。当時、日中戦争は収まるどころか拡大するばかり。職場の同僚も次々に応召して行くので、何時かは自分にも？と覚悟はしていたものの、現実となったとき何とも言いようのない気持ちになった。

それから30歳までの満6年間、菊部隊（第18師団）輜重の挽馬中隊の一員として、華南広東からビルマへと転戦。最後は見るも哀れな捕虜となり収容所生活を送り、終戦後1年目にしてようやく復員した。

広東では、はじめての洙江作戦に参加。太平洋戦争勃発後しばらくは師団全部の馬を預り広東に駐留していたが、17年暮、シンガポールからビルマへと進攻した。

そのころまで制海、制空権は略々わが方にあつたが、いつどこで潜水艦や飛行機に狙われるか分からない不安があつた。現にラングーン上陸直後、敵機に見舞われた。幸い直撃は免れたものの危うく上陸第一歩で死ぬところであつた。

広東も暑かつたが、ビルマの暑さはまた格別である。が、弱音は禁物。汗と泥にまみれながら北上、マンダレーからメイミョーに至り、さらに騰越近くまで糧秣、弾薬を輸送して反転した（この後、騰越、拉孟の守備隊は玉砕した）。

その後、わが菊兵団はインパール作戦を有利にするため援蒋ルート遮断の任に当たり、ビルマ最北端のフーコン地区へ進攻した（フーコンとは「死の谷」の意味といわれ、人跡未倒のジャングル地帯である）。

が、インパール作戦の失敗により、ほとんど潰滅に近いまでに敗れたため、彼我の戦況は一挙に逆転した。連合軍は矛先をわが兵団の方に向け、さらに空挺部隊を増強して後方を遮断した。ために補給路は完全に絶たれ、文字通り袋のネズミとなった。

そこで糧秣等の輸送を任務とする輜重隊は秘かに伐開路を作り、臂（ひ）力による輸送を図った。伐開路は全行程10km余り。途中の峠をナハイ峠と言ひ、軍は『筑紫峠』と名付けた。

最初は、後方から前線まで一気に臂送していたが、木を切り倒したばかりの山道を一気に運ぶことは、あまりにも酷でひどいので筑紫峠に中継所を設け、疲労軽減の措置がとられた。このとき、私は中継所での受渡しの任に当たった。

しかし、この状態をいつまでも続けておられるものではない。戦力は消耗し、やがては餓死である。かと言って、我れに数倍する敵を力でもって突破することは無理である。犠牲の方が大きい。そこでとられたのが、この伐開路を通つての脱出である。

が、時すでに雨期であり連日の雨である。路面はどろどろですべる。健康な者でも峠を越えるのは容易ではない。一日やっとなのである。ましてや長期間フーコン作戦に従事し、傷つきあるいは病魔に侵され疲労困ぱいしている兵にとってはあまりにも酷である。しかし、いかに酷で

あろうとも、この道を通らなければ死ぬしかない。

ある兵は杖をつき、またある兵は這いながら幾日も幾日もかかって峠を越えた。

最後は、私も前線を死守する部隊にわずかばかりの糧秣を背負って渡し、すぐに引返し後退したが、途中、精魂つき行き倒れになっている数多くの戦友を眼のあたりにした。

フーコンは一応脱出したものの苦戦はまだ続く。至る所で敵の追撃に遭い、また退路を阻まれた。もう歩兵も輜重もない。輜重隊も陣地については小戦闘を繰り返しながら敗走に敗走を続けた。この頃私は道に迷い部隊から離れ、かなりの期間一人行動をとっていた。

メイクテラまで南下したとき戦車に襲われた。その頃雨期は上がり連日猛暑である。わずかばかりの草むらに休んでいたとき「敵戦車」の声がした。顔を上げるとキャタピラの音と共に幾つもの黒い影が来ている。それまで爆撃には何回も遭ったが戦車ははじめてである。それこそ必死になって逃げた。ために方向を見失ったが、しばらく行ったところで現地人に教えられ助かった。

そして最後はシッタン河渡河である。夜間のこと、流れの速さや深さも分からない。泳ぐことに少し自信はあったが武装してのことである。最悪のことを考え、要らないものは捨て身軽くした。流れに逆らわないよう半ば流されながら斜めに渡った。幸い水深は浅く胸の付近までだったので助かった。

その後、数日かかってモールメン近くまで後退した。月白の道を後退しているとき、前線に連絡のため北上する参謀の護衛兵から「明日終戦になる。今少しの辛棒だ」と聞かされ内心ホッとした。嬉しかった。

が、喜んだのも束の間。なんと無条件降伏である。『生きて虜囚の辱めを受けず』と教育された者にとってこれ程不名誉なことがあるだろうか。空しく悲しかった。一時はほんとうに自決を考え、また逃亡を考えて持てるだけの食糧の準備もした。

しかし、逃げたとて後幾日生きられよう。「軽挙妄動は避け、辛いけど帰国する日をじっと待とう」と言う連隊長の言葉に、『そうだできることなら今一度日本の土を踏みたい。両親の顔も見たい』と思い直し、恥を忍んで捕虜の身となり、約1ヶ月後、皆と一緒に武装解除も受け収容所に入った。

戦後2回、他の戦友とビルマ巡拝をしたが、今なお遠いジャングルの中に多くの戦友が眠っていると思うと涙があふれた。戦争とは何か。人が人を殺すことである。平時は虫も殺さない人でも戦場という特殊な場所では人が変わる。特に極限状態ではまさに鬼である。

戦争はあらゆるものを破壊し、得るものは何一つない。また、肉身を引き裂き家庭の平和を根底から破壊する。人間の幸福などどこにも無い。

戦後50年。今日、わが国は平和憲法の下、戦争放棄をうたい、永年戦争知らずである。また経済大国となり生活は豊かである。が、その蔭には先の大戦において尊い多くの方の犠牲があることを忘れてはならない。今後も不戦を誓い平和憲法を守ることがこれら犠牲者の霊に応える道であると思う。